2022年12月10日（土）- 11日（日）
北海道大学札幌キャンパス

日本人間行動進化学会
第15回大会

日程

12/11 (土）

11:30	受付開始
12:30	実行委員会挨拶
12:40~14:00	セッション1（口頭20分×4本）
14:00~14:15	休憩（15分）
14:15~15:35	セッション2　(口頭20分×4本)
15:35~15:50	休憩（15分）
15:50~16:50	招待講演１（山内太郎先生）
17:00~18:00	ポスターセッション

12/12（日）

9:00~10:20	セッション3（口頭20分×4本）
10:20~10:30	休憩
10:30~11:30	招待講演2（相馬雅代先生）
11:30~13:00	ポスターセッション＋昼食＋理事会
13:00~13:30	総会
13:30~14:50	セッション4　(口頭20分X4本)
14:50~15:30	諸連絡、若手発表賞授与、閉会挨拶

大会について

●大会サイト

https://sites.google.com/hbesj.org/conf2022sapporo/

●参加資格・参加費

発表時点でHBES-J会員（正会員、学生会員、準会員、賛助会員）である方のみ参加できます。

オンサイト参加の場合、正会員 3,000円 、学生会員・準会員・賛助会員 2,000円の参加費が必要となります。オンライン参加の場合は無料です。

●若手発表賞

発表時点で学生もしくは学位取得5年以内の方が第一発表者である場合、若手発表賞の審査対象となります。

発表申込時に自己申告された方を対象として審査し、口頭発表部門から1件、ポスター発表部門から2件を選出します。

オンサイト会場

〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）

（受付・招待講演・総会・口頭発表）	文系8番教室
（ポスター発表）	W201、W202
（理事会）	W309

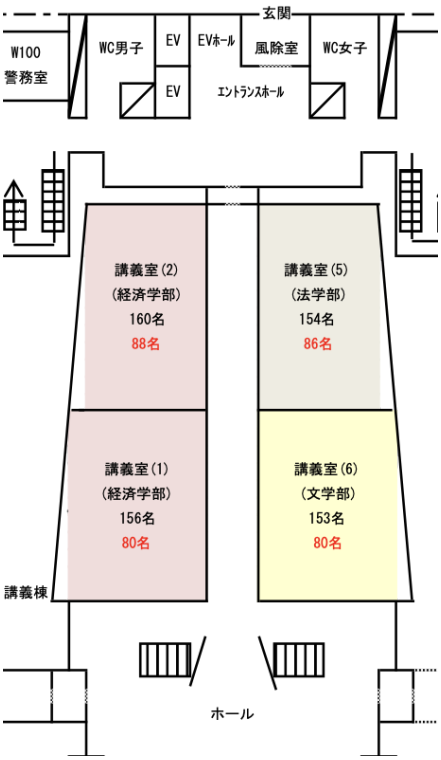
●GoogleマップへのQRコードおよびショートリンク

https://bit.ly/3Vtmytr

JR札幌駅　徒歩13分
地下鉄南北線　北12条駅　徒歩8分

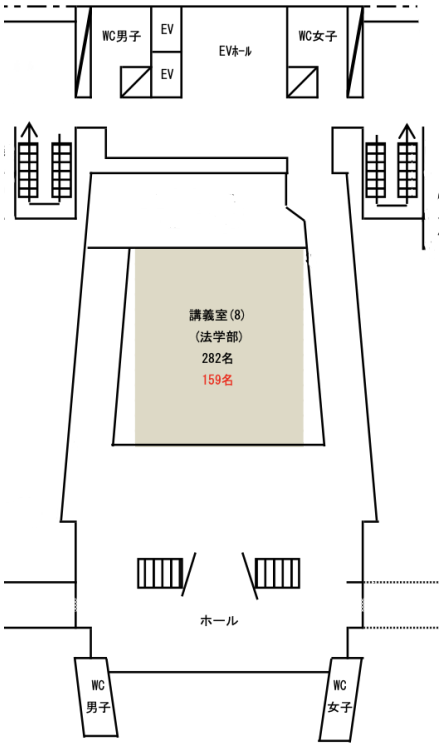
北海道大学札幌キャンパスを南北に貫く、
メインストリートに面した建物です。

●受付・講演・口頭発表・総会会場（文系8番教室）



1. 人文・社会科学総合教育研究棟の正面玄関を入ったら、突き当たりまで進んでください。

2. 広いホールに出ます。階段を昇ってください。



3. 2階へ昇るとメイン会場となる、文系8番教室（講義室8番）です。教室前で、受付をお済ませください。

●ポスター会場（W201, W202）

文系8番教室と同じ階にあります。ポスター会場まで案内板に従って移動してください。

●受付・クローク

メイン会場（文系8番教室）前に設置します。12/10(土)は11時半から、12/11(日）は9時より受付を開始します。参加費は、前日までに会員登録システムからお支払いください。現金で参加費をお支払いいただくことはできません。

クロークは設置しません。荷物はメイン会場（文系8番教室）にお持ち込みください。

●LEBS編集委員会

大会前にオンラインで開催されました。

●HBES-J理事会

12/11(日)11:30より、W309室にて開催します。メイン会場（文系8番教室）からご案内します。理事の方は招待講演2の終了後、会場でお待ち下さい。オンライン参加される方には、事務局よりメールでzoom接続情報をお知らせします。

●総会

12/11(日)13:00より、メイン会場（文系8番教室）で開催します。

●会場内WiFi

会場全体でeduroamをご利用いただけます。またメイン会場では、大会専用のWiFiルーターも設置します。PWは受付で配布します。

●昼食・休憩

両日とも、予約された方に昼食（無料）を配布します。土曜日は11時半の受付開始とともに、サンドイッチやパンを配布します。日曜日は、ミュージアムカフェぽらす（北大総合博物館内）のお弁当とお茶を提供します。数には限りがあります。参加申込の際に「昼食不要」を選択された方には、お配りできませんので、ご理解ください。

休憩時間中に、メイン会場（文系8番教室）でドリップコーヒー、紅茶を提供します。メイン会場付近に、ソフトドリンクの自販機が複数ありますので、そちらもご利用ください。

●キャンパス内のカフェ・ショップ

キャンパス内には、複数のカフェやショップがあり、週末も営業しています。いずれも正門から会場付近にかけて点在しています。

北大総合博物館の中には、ミュージアムカフェぽらす、ミュージアムショップぽとろがあります。日曜日の昼食には、ぽらすのお弁当を提供します。総合博物館は、会場となる人文・社会科学総合教育研究棟を出て正面にあります。

北大正門から会場までの途中には、北大マルシェCafé & Laboがあり、週末も軽食やランチ、カフェをご利用いただけます。また店内のマルシェでは、北大牛乳プリンやチーズなどのお土産を購入することができます。

北大正門を入ってすぐのインフォメーションセンター「エルムの森」の中には、カフェdeごはんや、北大オリジナルグッズを販売するショップが入っています。こちらも週末も営業しています。

会場から徒歩2分の場所に、セイコーマート北海道大学店（コンビニ）があります。人文・社会科学総合教育研究棟の正面玄関を出て、メインストリートを右手に向かって歩いてください。きのとやの札幌農学校クッキーの他、北大グッズも販売されています。

オンライン会場

●Gatherへのアクセス情報

Gather.townで開催します。招待講演、口頭発表、総会などメイン会場（文系8番教室）で開催されるイベントは、すべてzoomで配信します。Gatherにログインしていただいた後、講演会場に入室してxキーを押すと、zoomリンクが表示されます。

すべてのポスターは大会会場で印刷掲示しますが、Gatherのポスター会場でもpdfファイルを閲覧できます（ダウンロード不可）。Gatherでは、各ポスターの脇にホワイトボードを設置します。発表者との質疑応答にご利用ください。

Gatherへのログインアドレスは、参加申込された方に、前日までにメールで送付します。

Gather.townの推奨ブラウザはGoogle Chromeです。Firefoxでも問題はないようですが、Mac OSのSafariを使用するとうまく作動しないそうなのでご注意ください。専用アプリもあります(https://www.gather.town/download)。

●Gatherの基本的な使い方

- 最初にご自分のアバターを設定していただきます。アバターでバーチャル会場のなかを動き回れます。相手のアバターに近づくと、カメラがオンになり、会話ができます。チャットも可能で、こちらは相手との距離が離れていても利用できます。
- ポスター会場では、見たいポスターに近づいて xキーを押してください。
- 各ポスターの左横に置かれている白いものは「ホワイトボード」です。こちらに質問やコメントを書き込んでいただくことができます。ただし「誰が書いたのか」は記録されません。書き込む際にはお名前も合わせてご入力ください。

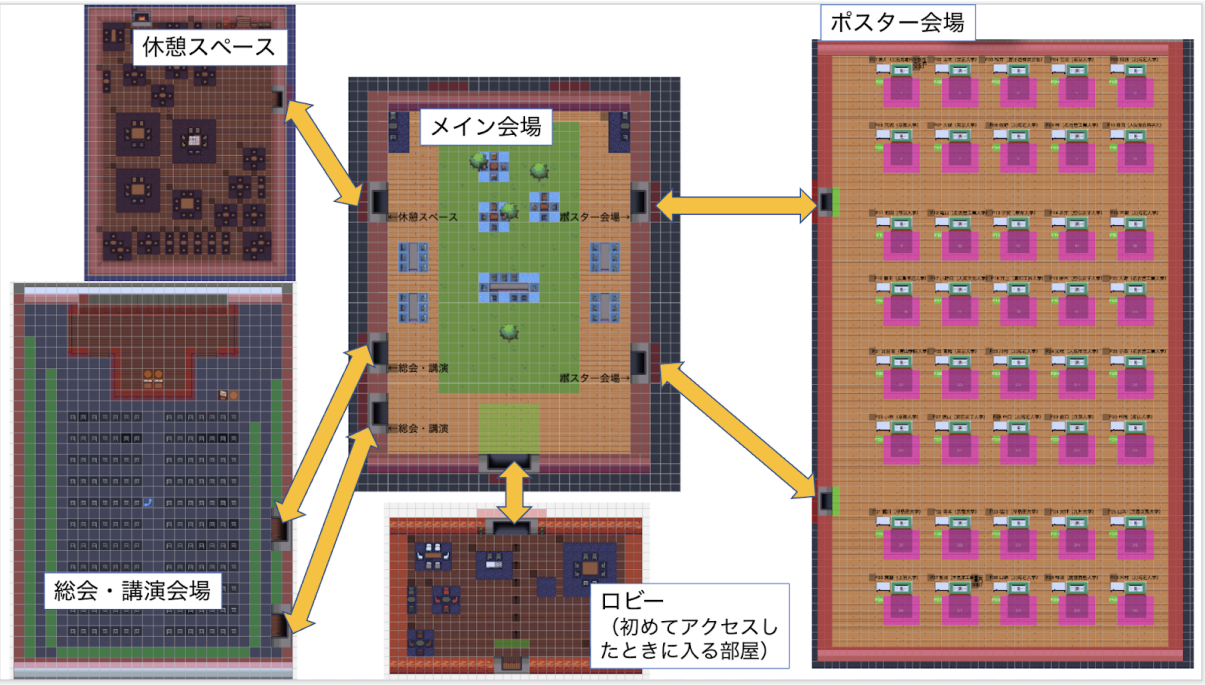
- ❖ 招待講演・総会・口頭発表（ライブ）を視聴するためには、Gather.townの講演会場に入り、xキーを押してください。Zoomのリンクが表示されるので、アクセスしてください。
- ❖ なお録画配信は行いませんので、ご注意ください。

●うまくいかない場合

- ❖ こちらのPDF で推奨環境とよくあるトラブルを解説しています。

●Gather会場フロアプラン

基本的に昨年と同様です。この中をパソコンの矢印キーでぐるぐる歩き回ることになります。テレポートもできます。



大会運営メンバー

竹澤正哲（委員長）
高橋伸幸
瀧本彩加
中島晃
結城雅樹
阿部紗采（Web担当）
貴堂雄太（庶務）
本間祥吾（Gather担当）
米村朱由（プログラム補助）

招待講演

招待講演1（12月10日 15:50~16:50）

山内太郎 （北海道大学環境健康科学研究教育センター／大学院保健科学研究院）

ヒトのライフヒストリーと成長・行動：狩猟採集民の子どもの生活世界

ヒトのライフヒストリー（生活史）を、他の霊長類と異なるユニークな成長パタンから概観する。その中で、乳児期、子ども期（Childhood + Juvnile）、思春期に着目し、アフリカ熱帯林に暮らすピグミー系狩猟採集民の育児協働と思春期の前後における行動変容を定量データから描き出す。さらに、子どもと森の関わりについて、食物獲得活動の視座から考察する。

招待講演2（12月11日 10:30~11:30）

相馬雅代 （北海道大学大学院・理学研究院・生物科学部門）

鳥の行動にみる歌とダンスの進化

人間の行動の進化，特にコミュニケーション能力の適応的意義を考える上で，鳥類は興味深い比較対象である．過去半世紀以上にわたって，鳴禽の歌（さえずり）は研究され，とりわけその獲得を支える発声学習は大きな注目を集めてきた．鳥の歌学習をヒトの言語獲得のモデルとなぞらえる潮流はいまだ根強く，確かに両者の学習機構に類似点は多い．しかし，鳥の歌はヒトの言語と本当にそれほど似ているのだろうか．そう考えた時に何より明瞭なのは，多くの鳥種でオスだけしか歌わず，ヒトの言語は雌雄に共有されるという相違である．一般に鳥の歌は性淘汰進化によるもので，オスによる縄張り・求愛の一方向的宣伝として機能しており，相互的な個体間のやりとりが常にあるとは限らない．さらに，鳥の「歌」という語そのものに明らかなように，鳥類のメロディアスな発声は，ことばよりむしろ音楽に音響特性上似ている側面もある．しかも，鳥の求愛コミュニケーションはしばしば歌以外にダンスを伴うため，なおさらヒトの音楽的行動を彷彿とさせる．これらをふまえ本講演では，鳥の求愛が雌雄双方向的な視聴覚コミュニケーションとして機能する事例を紹介しながら，社会要因がいかにコミュニケーション信号の進化を促してきたか考察したい．くわえて，鳥類の種間比較研究の結果をひきつつ，社会的一夫一妻の配偶システムと長期的に維持されるつがい関係という特徴が，コミュニケーション信号の進化とどう関わっているかについても考える．ヒトを含む様々な動物において，過剰なほどに複雑で派手なコミュニケーション行動がなぜ進化したか，という問いはいまだ十分に解明されたとは言い難い．本講演は，それに対する明快なこたえを示すものではないものの，今まで見過ごされがちがった手がかりを示すものとなるはずである．

口頭発表一覧

※「＊」がついている発表はオンラインでの発表、「☆」がついている発表は若手発表賞の対象発表です。また、「◆」がついている発表は全ての内容について、「◇」がついている発表は一部の内容について、SNSでの発表内容への言及はご遠慮ください。

Session 1　(12月10日　12:40~14:00)　座長：新井さくら

O01：☆◆評判管理戦略としての内集団ひいき：罰を用いた検討とパートナー選択理論による再解釈 (12:40~13:00)

新井さくら（玉川大学、University of California, Santa Barbara）
John Tooby (University of California, Santa Barbara)
Leda Cosmides (University of California, Santa Barbara)

外集団より内集団の成員に協力するような内集団ひいきは、集団を思うためでなく集団内での自身の評判への懸念ゆえに生じているかもしれない。例えば、自分が同じ集団の成員だと相手が知らない場合、内集団への協力が減ることが示されている。本研究は、罰を従属変数に、より単純な実験操作を用いて、この仮説を支持する新たな証拠を提出する。３つの実験（N = 723）で、内集団より外集団の成員をより罰する一方、内集団により協力するという二通りの内集団ひいきが見られたが、共に参加者が顕名でなく匿名の際に有意に低減していた。即ち、評判を傷つける心配がない時、内集団への罰と非協力が増加していた。メタ分析によれば、この匿名性の効果は実験状況や参加者プールによらず頑健だった。この結果は、罰が非協力と同様に評判を損なう行為として内集団に対しては控えられており、我々の心が集団をパートナー市場として認識していることを示唆する。

O02：☆離れうることは集まることを助けるか？ー閾値型公共財ゲーム実験を通じた検討ー

森隆太郎（東京大学）
花木伸行（大阪大学）
亀田達也（東京大学）

フリーライドの誘惑の下で広く協働できることは、かつても今も人間社会の発展に欠かせないが、そのメカニズムや成否を分ける条件は未だ社会科学の中心的な謎である。これまでフリーライダー問題を扱った研究はほぼ一様に、集団が所与であることを前提にしてきた。しかし、現実の協働では、離脱の自由を持ちつつ自発的に集まったヒト同士で集団が形成される場合が多い。

本研究は、離脱の選択肢が、協働に参加する集団の構成と他者の協力への期待を変えうることを理論的に指摘し、それを検証する閾値型公共財ゲーム実験を行う。実験の結果、離脱の選択肢は2つのメカニズムー①協力的な人の方が離脱しないという自己選抜、②（自己選抜の予期から）他者の協力に対する期待が高まることーを通じて、色々な誘因構造の下で、協働の成功確率を上げることが分かった。

逆説的なことに、小規模な人間の集団にとって、離れうることは集まることを助けるのである。

O03：☆◇誰がリーダーになるか？：鹿狩りゲームにおけるコーディネーションの行動・生理基盤

高野了太（東京大学・日本学術振興会）
亀田達也（東京大学）

集団全体として個々の行動を相互調整する「コーディネーション（協調）」をどのように達成するかという問題は，人間が社会的共存を実現するための適応課題である。本研究は，どのような相互作用を通じて協調が実現されるのか，その行動・生理基盤を調べるため，2者でマンモス捕獲（報酬大）or 各々ウサギ捕獲（報酬小）を選ぶ，マス目状の鹿狩りゲームを行い，プレイ中の心拍変動（行動のトップダウン制御と関連）を測定した。結果，心拍変動の高いプレイヤーを含むペア（高-高・高-低）は，含まないペア（低-低）よりマンモス捕獲率が高かった。また，マンモス捕獲意図に関わる行動指標について，高-高・高-低ペアのうち，より心拍変動の高いプレイヤーは序盤から高い値を維持した一方，低いプレイヤーの値はゲームが進むにつれ向上した。これらの結果は，心拍変動の高さが集団協調を実現するためのリーダー的振る舞いと関わる可能性を示唆する。

O04：＊☆◆複数の牧羊犬に対するヒツジの利己的な群れ行動の検証

仲田圭吾（琉大・工）
國田樹（琉大・工）
松本晶子（琉大・国創）

社会的生物の群れ行動メカニズムの解明は重要な科学的課題である。群れ行動の一つに、捕食の脅威がある場合に個々の動物が群れの中心に向かって移動することで自分の捕食リスクを軽減しようとする‘利己的群れ理論’がある。ヒツジの群れが牧羊犬に反応する様子はこの利己的群れ理論の典型例であり、最近の経験的研究では利己的な群れ行動が再現されている。ところが、1頭の牧羊犬のみを対象とした研究がほとんどで、自然下でしばしばみられる捕食者の共同狩猟については検討されていない。そこで本研究は、複数の牧羊犬に対するヒツジの行動規則を明らかにするために、ヒツジの群れと２頭の牧羊犬にGPSロガーを装着し、先行研究の牧羊犬が１頭の場合のヒツジの行動規則と比較した。牧羊犬が１頭よりも２頭のほうが、より早くヒツジを１か所に集めることができたことを報告し、少数の統率個体が多数の群れ個体を制御するシステムの有効性を検討する。

Session 2　(12月10日　14:15~15:35)　座長：板尾健司

O05：☆贈与関係による社会組織の遷移

板尾健司（東京大学）
金子邦彦（コペンハーゲン大学）

人類学者は世界各地で、人々が富を与え、受け取り、返礼するという三つの義務を伴う贈与を観察した。贈与が行われた場合、返礼に成功すれば取引相手との間に絆が生まれ、返礼に失敗すれば贈与の受け手が従属的な地位に追いやられる。この意味で、贈与は社会内の力の関係を構築する。社会内の力の関係の総体がなす構造として、親族関係に基づく平等なバンド、経済的な格差を含む中規模な連合である部族、階層的に組織された首長制社会といったいくつかの社会組織が知られている。本発表では、社会内での贈与関係をモデル化することで、贈与の頻度や規模が増大するにつれ、血縁関係に基づくクラスター性が強い社会から、取引による大規模な連合に移り、やがて社会の階層化が進み、バンド、部族、首長制社会に対応する諸相を呈することや、人々の間に経済、社会的な格差が生まれることを示す。また民族誌データベースの統計解析により理論の結果を検証する。

O06：☆協力は集団を超え、伝播するか — 他集団の成功者模倣に基づく協力の文化進化プロセスの検討 —

貴堂雄太（北海道大学・日本学術振興会DC1）
折懸海輝（北海道大学）
山下笑（北海道大学）
渡辺舜（北海道大学）
本間祥吾（北海道大学・日本学術振興会DC2）
竹澤正哲（北海道大学・社会科学実験研究センター・人間知×脳×AI 研究教育センター）

ヒトは社会的に学習し、行動を変容させることができる。近年では、ヒト特有の高度な社会的学習能力が背景となり、協力が文化的に進化し、大規模な協力社会が実現したという説が提唱されている（文化的集団淘汰）。その道筋の1つに、他集団の成功者模倣がある。ジレンマ構造を有する協力の場合、集団内で協力する成員は非適応的となるが、各集団成員の協力は、平均利得の高い成功集団の形成へとつながる。では、非協力集団に属する成員が、より成功している協力集団の成員の行動を模倣するプロセスは生じるのだろうか。本研究では、他集団の成功者模倣による協力の文化進化の可能性を、公共財ゲームを用いて実証的に検討した。その結果、協力が集団の垣根を超えて文化的に伝達されるが、その効果は限定的であることが示された。さらに、モデルフィッティングを用いた分析により、協力集団を観察する機会が意思決定プロセスに影響を与える可能性が示唆された。

O07：＊道徳性の進化要因と機能とは？：進化的暴露論証の基底の検証（仮題）

内藤淳（法政大学）

昨今の倫理学では、ヒトの道徳性（善悪に基づく規範的判断をする能力）を進化的適応の産物と捉えることで道徳的実在論（道徳的判断を客観的真理と結びつける考え方）を批判する進化的暴露論証が論争の的になっている。これを提唱するルースやストリート、ジョイスは、道徳性を「利他行動の動機づけ強化」という適応効果のゆえにヒトに進化したものと捉えるが、これに対しては、「動機づけ効果への疑問」や「道徳の多様性との不整合」などが指摘され、道徳的実在論の側からの反論も根強い。他方、利他行動との関連よりも人々の間での「他者非難」に着目し、「非難回避による自己防衛」を道徳性の進化要因と捉える見方が、デ=シオリ＆クルツバン、ボーム、ランガムによって提示されている。本報告では、こちらの見方に依拠したときに、道徳的実在論からの反論にどのように答えられるかを検討し、それによって進化的暴露論証の主張を強化する可能性を探る。

O08：☆◆ミリ波レーダを活用した飼育アカゲザルの呼吸の非接触計測

南俊行（京都大学大学院教育学研究科）
實松大介（京都大学工学部）
岩田慈樹（京都大学大学院工学研究科）
阪本卓也（京都大学大学院工学研究科）
明和政子（京都大学大学院教育学研究科）

呼吸は、霊長類の心身機能を評価するための指標とされる。従来、呼吸を可視化するためには、接触型の機器が用いられてきた。しかし、この装着自体が個体にストレスを負荷するとの指摘もあり、非接触型の計測技術の開発が求められてきた。近年、ミリ波レーダを活用して、非接触でヒトのバイタルサインを評価する技術が進んできた。本研究では、この技術をヒト以外の霊長類にも応用し、動物園で生活するアカゲザルを対象とした呼吸の可視化を試みた。屋外で休息する成体メス1個体に、約7.5m離れた距離から電波を射出し、得られた反射波から呼吸を推定した。その結果、54.80回/分の呼吸を検出できた。この値は、従来報告されてきたアカゲザルの平均呼吸数とほぼ一致しており、ミリ波レーダを用いた非接触での計測が可能であることが示された。本発表では、この試みを霊長類を対象とした研究に応用することの発展可能性と、その限界について議論する。

Session 3　(12月11日　9:00~10:20)　座長：中分遥

O09：◆未来のための技術的投資：世代間伝達を導入した探索と収穫のトレードオフ

中分遥（高知工科大学）
小林豊（高知工科大学）

世代間伝達を導入した技術的投資における探索と収穫のトレードオフ問題を検討した。技術的投資により多くの資源を投入することは次世代の利得を上げるが、こうした過剰な投資は現世代の個人の利得を下げる構造を持つ。本研究では、理論的および実証的にこの問題を検討した。具体的には、ある個人が「技術力向上（探索）」か「技術活用（収穫）」のどちらか一方を選ぶ意思決定を複数回行う課題を設定した。では、本課題において、開発した技術が次世代の他者に継承される場合、より多く探索をすべきなのか？理論的分析の結果、合理的個人は、将来世代の成功が自らの利益に還元されない限り、技術継承者の有無によって行動を変化すべきではなく、また実験でも利得が還元される条件のみで技術探索がより高い頻度で選択された。本研究の結果は、将来世代が単に存在することで人々の技術探索に与える効果は、限定的であることを示唆するものである。

O10：アップストリーム型とダウンストリーム型間接互恵性の統合モデルのダイナミクス分析

佐々木達矢（郡山女子大学短期大学部）
内田智士（倫理研究所）
岡田勇（創価大学）
山本仁志（立正大学）

人間社会における協力進化の主要なメカニズムの一つである間接互恵性は、アップストリーム型とダウンストリーム型に分けられるが、これまでほぼ個別に研究されてきた。ダウンストリーム型の協力のパターンは「私があなたを助け、そして他の誰かが私を助ける」と表され、アップストリーム型では逆に「あなたは私を助け、そして私は他の誰かを助ける」となる。このアップストリーム型の互恵者は相手を選ばないため一種の公共財であり、そのままでは非協力者に搾取され生き残れない。近年では、アップストリーム型をダウンストリーム型がサポートする組み合わせに関して、実証研究は出てきているが数理的研究は未だ少ない。そこで我々はこれら二つのタイプの統合モデルを構築し、進化ゲーム理論的分析を行ってきた。今回は、その分析結果から、互恵主義者と非協力者の二戦略の間に、従来モデルでは通常見られなかった、安定的な共存均衡が存在できることを示す。

O11：＊☆“Petty favor” facilitates rich-poor resource exchanges

陳佳玉（名古屋大学）
五十嵐祐（名古屋大学）

社会経済的不平等は、狩猟採集社会の時代から協力の進化に影響を与えてきた。人間は、富の多寡によって資源交換の相手を選択しようとする傾向がある。こうした富に基づく選好は不平等を深刻化させ、社会的分断を引き起こす。格差の是正には、富裕層と貧困層の資源交換を促進することが有効な方略だと考えられる。本研究では、二者間の繰り返し公共財ゲームを実施し、先にペアの相手にささやかな資源（petty favor）を渡すというシステムのオプションを提供することで、後続の資源交換が促進されるかどうかを検討した。参加者は富裕層の一員として割り当てられ、プログラムされたボットとペアを形成してゲームに参加した。その結果、協力的プアのボットにささやかな資源を渡すことで、参加者が後続の資源分配でより協力的に振る舞うことがわかった。相手にささやかな資源を渡すことで、社会階層を超えた資源交換を促進している可能性が示唆された。

O12：☆◆社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？－情報カスケードパラダイムを用いた実験的検討－

金恵璘（東京大学／科学技術振興機構 さきがけ研究者）
森隆太郎（東京大学）
Hugo Mercier（フランス国立科学研究センター）
亀田達也（東京大学）

近年、SNSにおけるデマ流しや悪意を持ったボットが人々の世論を操作する事例が報告されるなど、ソーシャルメディアを通じた社会の分断が大きな問題になっている。こうした現象はインタラクションによる社会情報の拡散が集合愚を招く事例として知らされている。本研究では、中立的な推定課題（e.g., 軽自動車の販売台数）と政治的偏見が働きうる推定課題（e.g., 外国人による犯罪件数）を用いて、社会情報が政治的偏見に基づくバイアスに与える影響を検討した。実験では、1050名の参加者が10問のクイズ（中立/政治）に逐次的に回答した。参加者は個人として１回目の推定を行った後、直前の3人の移動平均を知らされ、再度の判断を求められた。結果、中立的課題のみならず、政治的課題でも社会情報の共有が個人推定の正確さを改善させた。また中立的課題と政治的課題との間に人々の同調行動のパターンに差があることが明らかになった。

Session 4　(12月10日　13:30~14:50)　座長：小倉有紀子

O13：「共有現実」の社会的創発の認知・神経基盤

小倉有紀子(東京大学・JSTさきがけ)
黒田起吏(東京大学・JSPS・マックスプランク研究所・明治学院大学)
小川昭利(順天堂大学)
為井智也(立命館大学)
池田和司(奈良先端科学技術大学院大学)
亀田達也(東京大学)

人間の社会では、何が「普通」だと受け入れられているか、という「共有現実」・社会規範が日々生成されている。規範への服従に関する研究に比べ、規範が人々の相互作用を通じて生成する過程に関する研究は少ない。本研究では「ものの見方」の規範が生成する認知・神経メカニズムをfMRIで検討した。参加者は自分に歩み寄る「Aさん」、歩み寄らない「Bさん」とともにドット数推定課題を行った。相手が「Aさん」つまり自他が相互に歩み寄った場合、「ものの見方」は安定化し、他者の状態推定に関わる脳領域であるRTPJとDMPFCとの機能的結合が増大した。「Bさん」つまり相互収束を行わない相手の場合、RTPJ-DMPFC機能的結合増大や「ものの見方」の安定化は生じなかった。人々の「ものの見方」が相互作用を通じて「共有現実」に収束する過程では、他者の視点を取得するのに用いられる神経回路が主要な役割を果たしていると示唆される。

O14：＊ヒトはなぜ教えたがるのか一教示の欲求心理学的・行動遺伝学的構造

安藤寿康（慶應義塾大学文学部）

他者に何かを「教える」という行動は、学校的な状況下だけでなく、日常のさまざまな場面で誰でもが行っている普遍的な行動である。学校教育に限定されない一般的な教示欲求が「支援欲求」(eg.教えてほしいと頼まれれば喜んで教えてあげるなど)と「啓蒙欲求」(eg.わたしには人にぜひ教えたいことがある)の２因子からなり、支援欲求は友人・知人を助けようとする直接互恵性と関連が高く、遺伝的個人差が反映されないこと、また啓蒙欲求は見知らぬ人でも助けようとする間接互恵性との関連が高く、遺伝的個人差があることを、以下の5つのサンプルから示す。

サンプル 1 学生と教員 967人 (平均年齢19.9歳)
サンプル 2 双生児630組　(29.0歳)
サンプル 3 一般成人　1601人 (46.3歳)
サンプル 4 非双生児　600人 (47.8歳))
サンプル 5 双生児 400組 (36.1歳)

O15：＊◆Opacity of Mind尺度の開発

アダム・スミス（国際基督教大学）
杉本 匡行（国際基督教大学）
唐沢 穣 （名古屋大学）
ビナイ・ノラサクンキット（ゴンザガ大学）

他者の心理状態を理解して自分の心理状態を表現する能力は、社会性の特徴であると考えられる。このため、心の理論と共感に関する研究は比較、発達、進化心理学など、多くの分野で最前線に位置づけられている。しかし、意図のような精神状態が道徳的判断により無関係とされる不透明な社会がある。一方、「Be an Open Book」という思考が推奨される透明な社会も多く存在する。本研究は、心の不透明性と透明性の社会的な分散を尺度で表すことを目的としている。米国を対象とした予備研究、および米国（研究1＝512、研究2＝771）と日本（研究1＝713、研究2＝490）の参加者による2つの追跡研究からのデータを発表する。Opacity of Mindは一因子構成概念であり、日本は米国より不透明性が高いことを示唆している。生態学的な要因、相関する構成概念、Opacity of Mind 尺度の有用性について考察する。

O16：＊◆美男子平均顔の時代変化と女性の選り好み

高橋征仁（山口大学）
染川みさと（神戸市役所）

日本最大規模の美男子コンテスト「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」のBEST30通過者の写真をもとに、モーフィングアプリを用いて、4つの時期ごとに美男性平均顔を作成した。そして、大学生162名を対象者として、4つの平均顔の印象評価や魅力度を測定した。その結果、美男子平均顔の印象は、より新しい時期のものほど、より「穏やか」で「女性的」、「子ども好き」と評価されることが明らかになった。また、女子学生は、最も新しい時期の美男子平均顔を最も魅力的と評価したのに対し、男子学生の予測は異なっていた。さらに、この美男子平均顔に対する女子学生の選好は、①結婚相手に対する経済力の軽視や②子どもへの従順性の期待、③ブレイン・フォグ頻度の低さなどと関連していた。

これらの調査結果より、美男子平均顔にみられる従順性の増大という時代変化は、女性の選り好みや配偶戦略の変化と結びついていると考えられる。

ポスター発表一覧

※「＊」がついている発表はオンラインでの発表、「☆」がついている発表は若手発表賞の対象発表です。また、「◆」がついている発表は全ての内容について、「◇」がついている発表は一部の内容について、SNSでの発表内容への言及はご遠慮ください。

P01： 非協力者と関係を打ち切る行動は協力者にとっての方が非協力者にとってよりも有益な行動である

黒川瞬（北陸先端科学技術大学院大学）

協力は、自らの適応度を下げる行動であるため、その存在は説明を要する。協力は相手の適応度を上げる行動であるから、協力者とは関係を続け、非協力者とは関係を打ち切る行動は適応的であると考えられる。ここで、次の問いが立ち上がる。非協力者と関係を打ち切る行動は、協力者にとっても非協力者にとっても有益であるが、どちらにとって、より有益であろうか？この問いに答えるべく、相手が非協力者であれば関係を打ち切る協力者（非協力者）、相手が誰であれ関係を打ち切らない協力者（非協力者）の計４戦略が集団内に存在する場合を考え、進化ゲーム理論を用いて、囚人のジレンマゲームの解析を行う。パラメタ次第では、４戦略が共存する内部平衡点が存在するが、その内部平衡点における４戦略の頻度構成は、非協力者とは関係を打ち切る行動は、協力者にとっての方が非協力者にとってよりも、有益であることを意味する。

P02：AIと人の判断はどちらが受け入れられるのか：間接互恵場面を用いた分析

山本仁志（立正大学）
鈴木貴久（津田塾大学）

人工知能（AI）関連技術の急速な発展により人とAIの共存は世界的に大きな課題となっている。AIの普及はサービスの自動化にとどまらず人間の行動に対する評価にも応用されていくと考えられる。人間の行動の評価は、人間社会にとって不可欠な課題である。なぜなら、人々が互いの行動を評価し評価を共有する間接互恵性と呼ばれる仕組みが、大規模な相互協力を維持するための基本的な仕組みだからである。そこで本研究では間接互恵状況における正当化される非協力に着目する。正当化される非協力を受け入れる度合いが人間とAIの評価でどのように異なるか、また、その違いを決定する要因を分析した。その結果、AIによる判断と人間による判断の受容度には差がなかったが、AI技術への懸念が高い者はAIへの懸念が低い者に比べてAIによる否定的判断を低く評価し、肯定的判断を高く評価することが示された。

P03：＊他者行動に対する認識を考慮したEBPM向けの行動意思決定モデルの構築と評価

松井一樹（富士通株式会社）
橋本敬（北陸先端科学技術大学院大学教授）

本研究では、思考習慣としての制度が社会に定着し実効性を持つために、他者に関するどのような認知バイアスが影響するか見出すことを目指す。政策が制度として効果を発揮する政策効果メカニズムを検討するため、コロナ禍の外出自粛要請を例として、SNSインフルエンサーなど他者行動の影響を考慮したEBPM向けの行動意思決定モデルを構築した。本モデルでは、他者の意図を再帰的に深く予測する志向姿勢（Dennet 1987）にもとづく認知バイアスの影響を検討した。シミュレーション結果が東京都と岩手県での人流データと近似することを確認し、両県の振る舞いの違いが他者に対する思考の深さの分布の差異を反映していることを示した。Big Five パーソナリティの地域差（吉野・小塩 2021）も考慮すると、本研究の結果は、政策に対する人々の行動予測について地域ごとに他者に関する認知バイアスを考慮することの必要性を示唆する。

P04：☆先人にどう学ぶか：情報探索場面における系列的な社会学習の検討

菅沼秀蔵（東京大学）
内藤碧（東京大学）
片平健太郎（産業技術総合研究所）
亀田達也（東京大学）

本研究では，情報探索場面において先行するエージェントの意思決定を観察したあとに自らの判断で個人選択に移行する状況を設定し，観察可能な情報（エージェントの選択および報酬）を実験的に操作することで，社会的情報が探索行動に与える影響を実証的に検討した．その結果，マクロレベルの現象として以下の2つが確認された．①選択と報酬のうちいずれかが観察不可能な条件では，探索パフォーマンスが先行者から劣化した（＝累積性が損なわれた）．②他者の行動選択が観察できない環境では，観察学習の停止が遅くなった．以上に加えて本発表では社会的情報の処理過程を計算論モデリングの手法を用いて定量化・分析した結果を報告し，ミクロな社会学習方略（Kendal et al., 2018; Laland, 2004）が世代間における情報伝達というマクロ現象を生み出す認知的なメカニズムについて議論する．

P05：☆集団に有益な規範の文化進化：計算論モデリングによる社会学習モデルの検討

阿部紗采（北海道大学）
土田修平（北海道大学）
竹澤正哲（北海道大学・社会科学実験研究センター・人間知×脳×AI研究教育センター）

文化的集団淘汰（CGS）は、集団に有益な規範の進化を説明する理論である。CGSの鍵となるメカニズムは集団間競争と呼ばれ、集団に有益な規範を社会全体に伝播させる働きを持つ。阿部ら（2021）は、集団でn人スタグハントゲームをプレイする実験を実施し、集団間競争の一形態である成功者模倣によって、集団に有益な戦略が集団の境界を超えて伝播するか検討した。その結果、成功者模倣が可能な条件では、そうでない条件に比して集団に有益な戦略の拡散速度が速いことが示された。本研究では、参加者の意思決定プロセスを明らかにするため、個人学習と社会学習による5つの学習モデルをフィッティングした。モデル比較の結果、成功者模倣と頻度依存社会学習の階層的なモデルが、参加者の選択を最もよく予測することが示された。本研究の結果により、成功者模倣によるCGSが、集団間の武力闘争の要素なしに実験室で駆動することが示唆された。

P06：＊☆◆ペットと子どもは本当に仲良しなのか? -webアンケート調査によるペット-子の関係性の検討–

荒堀みのり（京都大学, アニコム先進医療研究所株式会社）
井上舞（ロイヤルカナンジャポン合同会社）
都築茉奈
齋藤慈子（上智大学）

イヌやネコはヒトが世話をする対象であるが、同じくヒトの大人から世話を受ける対象であるヒトの子どもを、ペットはどのように認識しているのであろうか。イヌやネコが子どもを世話する事象が世間の注目を浴びることもあるが、その実態については調べられていない。本研究では、イヌまたはネコを子どもが生まれる前から飼育しており、現在0-6歳の子どもがいる保護者を対象に、Webアンケート調査を実施した (イヌ: 270頭、ネコ: 224頭)。飼い主から見たペットから子どもへ、子どもからペットへの働きかけについての印象や行動について尋ね、それらのスコアに対するペットの種 (イヌ／ネコ)、子ども・ペットの年齢、ペットの性別の効果を調べた。結果では、飼い主から見て、イヌと比べてネコは子どもに対してネガティブな印象を持ち、行動していることがわかった。ポスターでは、年齢の効果などその他の結果についても発表する。

P07：☆進化生物学的手法を用いた民話の系統推定：蛇婿入り民話を題材として

久保京介(東京大・理・生物・進化人類)
井原泰雄(東京大・理・生物・進化人類)

物語は人類普遍的に見られる文化形質であり、その内容は伝達の過程で人々の心理に合致するように進化したことが示唆されている。一方で内容の進化を定量的に検証した研究は少ない。本研究は日本国内の蛇婿入り民話を対象に、定量的分類に基づく系統推定を行い、保存・共起される内容を予測する統計モデルの作成を目的とする。モデルの作成にあたり、内容に基づく民話の系統関係を明らかにする必要がある。そこで、日本昔話通観に収録される蛇婿入り民話の典型昔話を対象に、内容の有無と種類にもとづく系統推定を行った。内容の有無と種類は、民俗学の一領域である歴史・地理学派で用いられる分類基準を参考に、プロット変数と呼ばれる項目を作成することで多値で表現した。系統推定の結果、無根系統樹において大別して３種のクレードが確認された。また、多次元尺度構成法を用いた結果、内容は共起性を持ち、複数の内容が同時に進化する可能性が示された。

P08：☆◆斜行伝達の適応進化

佐野千夏(北海道大学)
竹澤正哲(北海道大学・社会科学実験研究センター・人間知×脳×AI 研究教育センター)

ヒトの文化学習能力は適応的な形質獲得を促進するために進化したにも関わらず、その結果として非適応的な文化が進化することは矛盾にも感じられるため、そのメカニズムについて数多く研究されてきた。そして、重要な役割を果たすのが斜行伝達だとされている(Richerson, 1984)。では、斜行伝達は適応的な社会的学習戦略として進化するのだろうか。本研究では、親と親以外の大人が文化親として対立する時、親以外の大人を選択する傾向を斜行伝達バイアスとし、エージェントベースシミュレーションによって検討した。その結果、斜行伝達バイアスは環境変動が極めて頻繁に起きる状況でのみ進化することが見いだされた。環境変動が稀な場合、生殖に成功した親は適応的な形質を持っている可能性が高く、親以外の大人を模倣することは適応的ではないためである。本研究の結果はRam et al. (2018)の知見とも一貫している。

P09：☆助けるのに値するのは誰か？：行動傾向と原因の統制可能性による検討

林奈津希（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

なぜ人は見知らぬ人を助けるのか？他人を助けることはコストのかかる行為だが、助けた相手から後で同じだけのお返しがあれば自分の適応度を高める結果となるため、利他行動は進化しうる。ここで重要なお返しの能力の指標となるのが、困窮の原因の統制可能性である。統制可能な原因にもかかわらず困窮した人は、自身の能力不足でそうなったと考えられ、援助後のお返しが期待できないと判断される可能性がある。また、被援助者のお返しの能力だけではなく、それを実際に行動に移すか否かも援助の意思決定の判断基準になるだろう。その指標となるのが被援助者の行動傾向である。そこで本研究では場面想定法を用いて、被援助者の行動傾向（利他的/普通）と原因の統制可能性（自責/他責）が援助の意思決定に及ぼす影響を、コストの異なる4つの援助行動を用いて検討した。それぞれの要因は援助の決定に有意に影響し、さらに交互作用があることが予想される。

P10：＊諸形質の人類に特異的な組み合わせが音楽の進化をもたらした？ 社会生態・認知・文化の進化に基づく三相モデル（レビュー）

森田理仁（人間総合科学大・人間科学 ／ 東京大・理）
西川有理（東海大・医 ／ 東京大・理）
徳増雄大（東京大・理）
井原泰雄（東京大・理）

ヒトにおける音楽の進化シナリオとして，人類史に基づく三相モデルを提唱する．フェイズ1はヒト亜族とチンパンジー亜族の共通祖先から常習的な石器製作が見られる前までの段階（約700〜260万年前）で，猿人での社会性と生活史の進化に注目する．フェイズ2はオルドワンから現代人的行動が見られる前までの段階（260〜10万年前）で，ホモ属での認知・学習能力の進化に注目する．フェイズ3は現代人的行動の出現から今日に至る段階（10万年前以降）で，新人の文化進化に注目する．音楽的要素が限定的であった音声コミュニケーションがやがて柔軟さと複雑さを増し，最終的には楽器や言語能力を伴い現在の形になったのだろう．我々の音楽に関する能力と産物は，直立二足歩行，雄間競争の減少，共同繁殖，脳の増大，複雑な社会学習，集団内外での協力と対立，文化的性淘汰といった諸形質の「人類に特異的な組み合わせ」によってもたらされたと考える．

P11：◆パラノイアと競争的意図の推測

堀田結孝（帝京大学）

進化・適応論的観点からパラノイア（他者から危害的意図を向けられていると過大視する傾向）を社会的脅威の検出機能として捉えた上で、様々な実証研究が行われている(Raihani & Bell, 2019)。パラノイアは他者を利己主義者として信じる傾向よりも、他者の競争的意図（自他利益の格差の最大化の志向）を過大推測する傾向を強く反映すると予想される。本研究では特殊な独裁者ゲームを通して、上述の可能性を検討した。独裁者ゲームの受け手は、分配者からの分配を選ぶか、それとも分配者から低い金額を分配されるリスクを避けて確実な低い金額の報酬を受け取るかを決めた。実験の結果、パラノイア思考が強い受け手ほど、たとえ競争的分配の選択が分配者にとって不利益な場合であっても、分配者は競争的分配を選択するだろうと予想する傾向が強かった。ただし、パラノイア思考は、分配者からの分配を避ける傾向と関連が見られなかった。

P12：☆他者と自分のどちらが道徳的か？：MFQと文化的自己観を用いた検討

亀山翔弥（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

場面想定法を用いた研究により、アメリカ人は、同じ内容でも非道徳的行動の場合には自分よりも他者一般のほうがより行うだろうと予想する一方で、道徳的行動の場合には他者一般より自分のほうがより行うだろうとは予想しない傾向があることが示されている。しかし日本人を対象とし、Haidtらが提唱した５つの道徳基盤について調べたところ、「連帯志向」に分類される「神聖」と「忠誠」について自分の方がより行うと予想するという結果となった。ただ、場面想定法では個々の想定場面の違いが結果に影響する可能性がある。そこで本研究では、５つの道徳基盤についての態度を測定する尺度である道徳基盤質問票（MFQ）を改変したものを用いて先行研究を追試した。さらに、自己高揚や自己卑下が自らの置かれた文化への適応であるという文化的ゲームプレイヤーの観点から、回答者の文化的自己観を測定し、道徳性の自己高揚/卑下との関連性について検討した。

P13：＊☆◆ネコにおける視覚的特徴を基にしたHomophilyの探索

子安ひかり（麻布大学）
藤山菜々子（麻布大学）
高木佐保（麻布大学・日本学術振興会）
永澤美保（麻布大学）
菊水健史（麻布大学）

共通点のあるもの同士で親和的関係を構築するHomophilyは自然界に遍在し、あらゆるネットワーク形成に影響を与える。ヒトでは視覚的特徴が大きな影響を与え、遺伝的要因を排除しても生じる。また、本来単独性のネコが集団を形成する際にも非血縁個体において特定の個体間のつながりが強い。そこでネコにおいて視覚的特徴を基にしたHomophilyが存在するかを明らかにすることを目的とした。SNSを用いたネコ写真の毛色調査の結果、同じ毛色同士でいる割合がチャンスレベルより高かった。次に2つの毛色のぬいぐるみに対するネコの行動実験を実施した。対象ネコと類似した/異なる毛色のぬいぐるみを2つ設置し、それらに対する行動解析の結果、同じ毛色に対してより興味を示す個体が存在した。これらのことから、ネコにおいて毛色がネットワーク形成を促進し、視覚的特徴を基にしたHomophilyが存在する可能性を示した。

P14：＊☆加害者のパーソナリティが謝罪にかけるコストに与える影響

永井未知留（聖心女子大学）
岸本健（聖心女子大学）

謝罪を相手に受容してもらうためには，加害者に何らかの不利益となるコストを払う必要がある。Ohtsubo and Yagi(2015)では，相手との関係価値が高いほど謝罪にコストをかけることが示された。本研究の目的は，先行研究の結果が再現されるか確認することに加え，加害者のパーソナリティが謝罪にかけるコストに影響を与えるか検討することであった。本研究では学生140人を対象とし，謝罪相手が友人の場合と上司の場合に分け，謝罪コストをチェックボックスにチェックをつけた個数で測定した。分析の結果，謝罪コストは関係価値との間に有意な関連性を有さなかった。一方，パーソナリティとの関連では，謝罪の相手が友人の場合，協調性が低い協力者ほど謝罪コストが大きくなることが示された。よって，協調性が低いと自覚している者は，コストをかけて謝罪することで，謝罪に対する「誠意」を補おうとしているのではないかと考えられた。

P15：☆変動性とリスクが存在する環境における適応的な強化学習：進化シミュレーションによる検討

本間祥吾（北海道大学・日本学術振興会）
竹澤正哲（北海道大学）

現生人類が進化した更新世の自然環境は、突然の大きな変化と暫くの安定を繰り返す特異な変動性を示していたことが知られている。本研究は、このような変動環境において適応的な学習アルゴリズムを明らかにすることを目的とする。本間・竹澤 (2020) は、リスクのみが存在する状況を複数経験する場合、強化学習の負の学習率パラメータ（負の予測誤差への重み）が低い値に進化することを見出した。本研究では、リスクに加えて環境変動も存在する場合、学習率がどのように進化するのかを検討した。シミュレーションでは、リスキーな選択の期待値が非リスキーな選択より高い二腕バンディット課題と、その逆の課題が確率的に遷移する環境変動を導入した。結果、低い負の学習率が進化するという、複数のリスク状況下での進化に似た結果が見られた。これは、リスク状況に適応した学習システムによって変動性に対しても十分対処できる可能性を示唆している。

P16：☆二八の法則は成立するか?

棗田みな美 (広島修道大学)
横田晋大 (広島修道大学)
中西大輔 (広島修道大学)

本研究では、2種類の集団課題 (分離型／加算型) において、二八の法則に基づく集団内の安定的均衡が観察されるか否かを検討した。二八の法則とは、集団や組織が一部の働き者と多数の怠け者によって構成される経験的観察のことである。75名の大学生が参加した実験では、4か5人集団で5試行の集団課題を行った。その際、実験の報酬は、最も作業量が多い成員の成績によって決まる (分離型課題) か、全成員の作業量の平均値で決まる (加算型課題) と教示された。その結果、分離型課題では、相対的に作業量の多い成員と少ない成員との間に差が見られ、この差は試行を経ても変わらなかった。一方、加算型課題では、試行経過に伴い、集団内の成員間の作業量の差は小さくなった。以上より、分離型課題では二八の法則に基づく均衡が観察され、加算型課題では観察されなかった。

P17：社会的ジレンマにおける罰行動が引き起こす集団間の代理的な報復行動

小野田竜一(大東文化大学)

社会的ジレンマ(SD)では、非協力者への罰行動が協力を進化させる(Fehr & Gächter, 2002)。本研究では、複数の集団がある状況を想定した。その際、SDの非協力者に対して、外集団の個人による罰行動が生じると、被罰者と同集団の個人が、罰行使者や罰行使者と同集団の個人に対して代理的な報復行動をとることが予測される。本研究では、外集団成員からの罰行動が代理的な報復行動を引き起こすか否かとその心理的背景を実験室実験で特定した。その結果、外集団の罰行使者に対して、被罰者と同集団の個人による代理的な報復行動が生じたことが示された。さらに「外集団全体への恐れ」が「外集団全体の攻撃意図の認識」に影響を与え、「外集団全体への報復動機付け」へと繋がり「報復行動」を引き起こすという心理的背景を特定した。本研究は、集団間の代理的な報復行動という負の集団現象を罰行動が引き起こすことを発見したといえる。

P18：COVID-19の身近な感染脅威が大学生の予防行動に与える影響 ー行動免疫システムの観点からの検討ー

井上裕香子（高知工科大学）
松本良恵（西南学院大学）
清成透子（青山学院大学）

行動免疫システム（BIS）は人々が感染症から身を守るために進化的に獲得した、病原体の手がかりを検知し回避するための一連の認知・行動傾向である。ただし、回避にはコストを伴うため、BISは感染の脅威を示す手がかりに反応して活性化し、感染回避の利益が高い状況でより強く働くとされている（機能的柔軟性）。現実のパンデミック下におけるBISの働きを調べるため、本研究では大学生のCOVID-19パンデミック下での行動を検討した。具体的には、BISが機能的柔軟性を持つならば身近な人が感染した経験がある人の方が予防行動をすると予測し、オンライン調査で検討した（第5波直前の2021年7月に実施）。しかし、予測に反して身近に感染者がいる人はそうでない人より感染回避反応が低く、予防行動を行っていなかった。大学生では、感染のリスクと人間関係維持による利益のトレードオフが起きていると考えられる。

P19：飼育チンパンジーにおける道具使用の内発的動機づけ

岸本健（聖心女子大学）
永井未知留（聖心女子大学）
大栗靖代（日立市かみね動物園）
生江信孝（日立市かみね動物園）

霊長類の道具使用の学習に，食糧による報酬が不可欠なのであろうか。本発表では，日立市かみね動物園の推定44歳のチンパンジーが，木の枝を駆使してケージ外のビデオカメラを引き寄せた事例を紹介する。このチンパンジーは2022年8月6日に，ケージ外の手の届かない場所に設置された行動記録用のビデオカメラに対しおよそ10分間にわたり，枝を差し出して試行錯誤し，最終的にビデオカメラを引き寄せ，手でつかむことに成功した。加えて，この日より以前の映像には，少なくとも2か月以上前から，木の枝以外の物体（藁など）をケージ外のビデオカメラに向ける様子が記録されていた。当該のチンパンジーにとってビデオカメラに働きかけることは，食糧などの報酬獲得に結び付いていない。それにも拘らず，ビデオカメラを引き寄せるために道具の使用を繰り返したことは，道具使用の学習に対するチンパンジーの内発的な動機づけの存在を示唆する。

P20：☆制御幻想は他者への宣伝機能をもつのか？

大野将太郎（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

自己欺瞞のひとつとして、本当はランダムに決まる結果を自らが制御していると思い込む制御幻想がある。Kurzban（2012）は自己欺瞞について、心のモジュール仮説から、自己の能力を宣伝する機能と正確に事象を把握する機能が別々に働いている結果であると提唱している。制御幻想がほかの自己欺瞞と同様に他者への宣伝能力として機能しているのであれば、賞賛獲得欲求が高い人ほど制御幻想が強くなると考えられる。そこで本研究では賞賛獲得欲求尺度と拒否回避欲求尺度を用いて、制御幻想と2つの欲求の強さとの関連を調べた。まず参加者に対して随伴性課題にウェブ上で取り組んでもらった。その後、賞賛獲得欲求尺度と拒否回避欲求尺度に答えてもらい、課題の制御感の強さ尺度得点との相関を分析した。その結果、制御幻想は生じたが、その強さと賞賛獲得欲求の強さの間に有意な相関関係はなく、制御幻想が他者への宣伝機能をもつとはいえなかった。

P21：☆相互作用場面における相互独立・相互協調的人物に対する選好

比留間圭輔（青山学院大学大学院）
井上裕香子（高知工科大学）
松本良恵（西南学院大学）
清成透子（青山学院大学）

文化心理学は、欧米では自己を独自の存在と捉える相互独立的人間観を持ち、東アジアでは自己を他者と重なり合った存在と捉える相互協調的人間観を持つと考え、これを文化的自己観と呼んでいる。これに対して、山岸と橋本は適応的視点から自己観を再考し、日本人が示す相互協調性は必ずしも個人の選好ではなく、周囲から排除されることを回避するための適応的な行動傾向だと論じている。橋本（2011）は、日本人は本心では相互独立的な人に好意的だが、他者は相互協調的な人を好意的に評価すると予測するため、自身も相互協調的に振る舞うことを質問紙調査で明らかにした。ただし、この評価は回答者とは無関係な他者に対するものだったため、本研究では回答者自身が相互作用の当事者でも同様の結果が得られるか検討した。基本的には橋本（2011）の知見は再現されたが、協働作業場面では回答者が相互協調的な人をより選好する可能性が新たに示唆された。

P22：☆世代を超えた協力を作るには —後続世代の存続に着目して—

髙橋茉優（東京大学）
亀田達也（東京大学）

「誰かに助けられたら、ほかの誰かを助ける」というアップストリーム互恵性は理論的には簡単に進化しない（Nowak & Sigmund, 2007）。一方、世代間正義を扱った実験研究では先行世代が協力するほど後続世代も協力する傾向が見られた（廣光, 2021）。廣光は、先行世代の選択から”協力の相場”が形成されたという可能性に注目したが、本研究では、「自分に直前世代が協力したから自分も直後世代へ協力する」という近接世代間での「条件付き協力」メカニズムが連鎖を生み得ると考えた。実験参加者は世代1~3として原資の一部を次世代への貯蓄（協力）に残すか私的に使うかを選択した。世代3の選択行動は、世代1・2の平均協力（“相場”）よりも世代2の選択から影響されており、直近の世代2が協力すると世代3も（世代4へ）協力する傾向があった。以上から、世代間正義などを支える「拡大された互恵性」の可能性が示唆された。

P23：☆一般交換状況における情報伝達バイアス

川村樹（北海道大学文学院行動科学研究室）
真島理恵（北海道医療大学）
高橋伸幸（北海道大学大学院）

間接互恵性の成立基盤に関する理論研究が行われてきた（e.g., Nowak & Sigmund, 1998a, b）。しかし、真島ら（2021）は、これらの理論研究では「人々が誰かの行動を見た場合、それをそのまま他者に伝達する」ことを前提としており、情報伝達に際してのバイアスについて全く想定されていないことを指摘した。そこで一般交換状況における人々の情報伝達行動について実証的検討を行った結果、「評判の良い人の行動を他言するのを避ける」「非提供行動を他言するのを避ける」という2つのバイアスの存在が示された。しかし、なぜその情報伝達バイアスがみられたかは未だ明らかではない。そこで本研究では、真島ら（2021）のデータを用い、情報伝達バイアスの至近因を検討した。結果、様々な要因を統制してもなお上述のバイアスは一貫してみられ、これらのバイアスを説明する要因は解明できなかった。

P24：＊☆社会的交換ヒューリスティックスの働きとその抑制 —「減額方式」の囚人のジレンマゲームを用いた分析

光枝柚香（大阪市立大学文学部人間行動学科心理学コース）
橋本博文（大阪公立大学大学院　文学研究科）

社会的交換ヒューリスティックス（SEH）仮説によると、人々は囚人のジレンマゲーム（PDG）を安心ゲームへと主観的に構造変換することにより、相互協力を目指すように仕向けられるとされる。先行研究では利得を前提とするPDGのみ用いているが、本研究では損失を前提とする減額方式のPDGにも着目しSEHの働きを分析した。まず、先行研究と同様に望ましさ得点に着目した質問紙調査の結果、従来のPDGでは相互協力に対する選好が示される一方、減額方式のPDGでは損失額が増すにつれてそうした選好が示されにくくなった。しかし、金銭的インセンティブを設けたゲーム実験を実施すると、望ましさ得点の結果は再現されるものの、どちらのPDGでも協力率は6割を超えること、協力者は非協力者よりも意思決定時間が短いことなどSEHの働きを示唆する結果を得た。以上の結果は望ましさ得点のみからSEH仮説を議論することの限界を示唆している。

P25：☆Knobe効果のエラーマネジメント理論による検討

小森啓志(名古屋工業大学)
小田亮(名古屋工業大学)

Knobe効果とは、ある行為が良い結果をもたらした場合には意図的な行為とは判断されないが、悪い結果の場合には意図的であると判断されるというものである。本研究では、この効果が起きる理由についてエラーマネジメント理論の観点から、場面想定法を用いて検討した。意図帰属の機能として、相手の行動を予測することで対処を可能にするということがある。良い結果については対処の必要は無いが、悪い結果については第二種過誤のコストが大きくなるので対処する必要があり、そのため意図の帰属が起こるのではないかと考えられる。そこで環境改善を目的とした行為の副次的効果として会社の利益/損失を設定し、副次的効果が自身の利害につながる場合とつながらない場合とのあいだで意図帰属の程度を比較した。もし意図帰属が第二種過誤のコストによって影響されるのであれば、会社の損失が自身の損失につながる場合に帰属の程度が強くなると予想される。

P26：☆オキシトシンが馬と人の種間関係に与える影響

小林知奈（京都大学）
リングフォーファー萌奈美（帝京科学大学）
木下こづえ（京都大学）
池田泰彦（JRA日本中央競馬会）
宮田健二（JRA日本中央競馬会）
山本真也（京都大学）

オキシトシンは、いくつかの哺乳類において社会的関係性を構築するのに重要な役割を担っている。しかし、ウマにおけるその社会的機能、およびオキシトシンがウマとヒトの種間親和性を促進するかどうかについての研究はほとんどない。本研究の目的は、馬にオキシトシンを経鼻投与した後、馬とヒトの関係に及ぼすオキシトシンの影響を調査することである。仮説は以下の二つである。オキシトシンが一般的に親和性を促進し、投与後に馬は親しい人と知らない人の両方に対して友好的な反応を示すという一般的親和促進仮説と、オキシトシンは馬と親しい人の間でのみ親和性を促進し、投与後に馬は親しい人に対してのみ友好的反応を示し、知らない人には中立または敵意を示す反応をするという選択的親和促進仮説である。我々は、馬の行動指標を取るとともに、心拍変動や血中コルチゾール濃度などの生理的反応を測定することによって、これらの仮説を検証した。

P27：☆◆平等の価値は如何ほどか：エルファロルバーゲームを用いた検討

須山巨基（安田女子大学）
佐藤浩介（バンダイナムコ研究所）
犬飼圭吾（明治学院大学）

チキンゲームのような反協調ゲームで繰り返しゲームを行う場合、各プレイヤーが「平等な」報酬を得ようとする場合、最も効率的な方法は戦略を交互に切り替えるターンテイキングを行う必要がある。理論的には最初に有利な戦略を選んだプレイヤーは戦略を変える必要はないが、実際にチキンゲームを参加者に行わせるとターンテイキングを行うことが知られている。

しかし、ターンテイキングはあくまで相手が次のどの戦略を取るのかが予想できる場合にのみ使えるが、参加者が３人以上のゲームでは予想を行うことが困難となり、ターンテイキングは使えなくなる。このように、ターンテイキングが使えない複数人での反協調ゲームの一種がエルファロルバーゲームである。本研究では、エルファロルバーゲームを行う前に平等分配が望める制度と自ら戦略を選ぶ制度を選べる状況を作り、参加者がどちらの制度を選択し、利得の最大化を図るか検討する。

P28：☆手がかりの違いに基づいたプレステージバイアスの計算論モデル構築

中田星矢（北海道大学、日本学術振興会）
外谷弦太（帝京大学、日本学術振興会）

名声のある個人を選択的に模倣する傾向はプレステージバイアスと呼ばれる。プレステージバイアスは累積的文化進化、非適応的な文化進化、協力規範の拡散などを促進し、ヒト社会を説明する重要な要素として注目されてきた。だが、プレステージバイアスの操作的な定義は研究間で多岐に渡っており、他の社会的学習バイアスと比べて定式化が十分でない。本研究では、プレステージバイアスに関する理論的な検討を進めるために、2種類のモデルを構築し、その性質の違いを検討した。一次の手がかり（職業や称号など個人に属する特徴）に基づくバイアスと二次の手がかり（多くの人から注目を集めるなど他者に行動による特徴）に基づくバイアスそれぞれのモデルの下で、文化形質の頻度変化をシミュレートした。どちらのモデルでもプレステージバイアスによって一つの文化形質の頻度が増大したが、文化形質の突然変異に対する反応はモデル間で異なった。

P29：☆囚人のジレンマゲームの利得表を反転させると協力率は低下するのか？

前田楓（立教大学）
橋本博文（大阪公立大学大学院）
谷田林士（大正大学）

本研究の目的は、囚人のジレンマゲーム（PDG）における相互協力の結果が従来の多くの研究と同様に左上に提示される条件（統制条件）に加え、利得表の相互協力と相互非協力の結果の位置を反転させ、相互非協力の結果が左上に提示される条件（利得表反転条件）を設け、利得表を反転させることが協力率の低下をもたらすか否かを分析することにあった。各条件での1回限りのPDGにおける意思決定および意思決定時間を比較した結果、協力率には条件差が示されなかったが、意思決定時間に関しては条件の主効果および条件と意思決定（協力・非協力）の交互作用が示された。統制条件においては、協力者の意思決定時間が非協力者よりも有意に短くなるが、利得表反転条件ではそうした差異は示されなかった。この結果は、利得表を反転させることにより、社会的交換ヒューリスティックスが抑制され、直観的協力行動もまた示されにくくなる可能性を示唆するものである。

P30：古墳時代古人骨頭蓋形状の幾何学的形態測定による分析

中尾央（南山大学）
中川朋美（南山大学）
田村光平（東北大学）
金田明大（奈良文化財研究所）
吉田真優（南山大学）
野下浩司（九州大学）

古墳時代の古人骨頭蓋形状については、ある程度の資料数を基に、こちらもある程度広域的に、従来の計測値ベースの考察が行われてきた（Tanaka & Doi 1987; 寺門1980）。とはいえ、これらの研究には（1）数百年にわたる古墳時代を一括りにしてしまっており、古墳時代の細かな形態変化が追えていないことと、（2）近年頭蓋資料もさらに増加しており、それらを新たに検討材料に加えねばならないという課題が残されている。本研究はこの二点を補うべく、より詳細な時代区分を踏まえた（主に近畿～東日本の）頭蓋形状変化を幾何学的形態測定（具体的にはランドマーク法）で考察し、それを踏まえた人類集団の変化、また可能であればそれに伴う文化の動態についても考察を行う。

P31：＊☆◆異性双子の出生体重比を用いたTrivers-Willard仮説の検証

瀧川諒子（早稲田大学大学院文学研究科）
福川康之（早稲田大学）

Trivers-Willard仮説によると，状態のよいときに息子を，状態の悪い時に娘を多く産む母親は，より多く自身の遺伝子を残すことができる。本研究の目的は，異性双子における男児と女児の出生体重比に対する母親の出産年齢の影響を検討し，ヒトにおいてこの仮説を検証することであった。National Family Health Survey IVのデータベースより抽出したインド人の異性双子ペア668組が分析の対象となった。ANCOVAにより，母親が低出生体重児を出産するリスクが高い年齢（20歳未満または35歳以上）であるとき，男児/女児の出生体重比は小さくなる（女児が重くなる）ことが示された。結果は，出生体重に影響を及ぼし得る各変数を統制した後も有意であった。これらの結果は，ヒト女性に包括適応度を下げる可能性が高い胎児に対する子宮内選択の機能が維持されていることを示唆している。

P32：＊☆ヒト集団の性交頻度の推定・種間比較を可能にする指標を開発するために必要なレビューワーク

寺本理紗(京都大学)

ヒトの女性の生殖上の特徴は、妊娠のために頻回な性交が必要であり月経周期全体を通じていつでも性交可能な点にある。性交回数と健康上のコストは比例するので、女性を生涯的に膨大な回数の性交にさらすような、これら一見不適応にもみえる形質がヒトでなぜ残ってきたのかは大きな謎である。しかし近年の証拠は、女性は頻回な性交と同様、セックスレスのような性交頻度の制限にも直面していることを示しており、女性の生殖の形質がなぜ不可解なのか？という進化上の謎に答えるためには、ヒトの女性が十分な性交頻度にアクセスできないリスクもあわせて検討する研究が必要だ。そこで、本研究では、eHARFを用い、さまざまな社会・生態のヒト集団を対象に性交頻度の変動に関わる要因・頻度を抽出・整理し、集団間・種間比較を容易にするためのレビューワークをおこなった。女性の性交頻度は他の霊長類と比較し、多くの制約を受けていることが示された。

P33：＊◆行動免疫と食物嗜好との関連に文化差はあるか

福川康之（早稲田大学）
瀧川諒子（早稲田大学）
Salanga M. Guadalupe（De La Salle University）
Soon-Aun Tan（Universiti Tunku Abdul Rahman）

生存や繁殖に有用な食物を摂取することは，ヒトの適応にとって重要な課題の一つである．本研究では，食べ物の好みと行動免疫との関連を国際比較により検討した．フィリピンおよびマレーシアの男女大学生を対象として，感染嫌悪（病原体と接触しやすい状況に対する不快感の自覚）と，安全性（”食中毒の心配がない”など）や自然性（“添加物が含まれていない”など）といった食嗜好に関する調査を行った．得られた計469名のデータを用いて，上記の測度間の相関を，性別，年齢，健康状態を統制したうえで検討したところ，感染嫌悪は安全性や自然性を重視する食嗜好と概ね正の関連を示した．ただしこの傾向は，マレーシアの学生よりもフィリピンの学生に強かった．本研究の結果は，行動免疫と食物嗜好との関連が，進化的基盤のみならず，公衆衛生や宗教といった何らかの文化的基盤からの影響も受けている可能性を示唆するものである．

P34：☆◆外集団攻撃行動の表出が行為者の内集団成員からの評判に及ぼす影響の検討（研究計画）

大坪快（九州大学）
山口裕幸（九州大学）

過去の外集団攻撃研究では，集団内の成員間の相互作用が外集団攻撃を生むプロセスについてはあまり研究されてこなかった。しかし，現実の紛争場面においては，内集団成員からの評判を気にして外集団攻撃が生じることが多くある。本研究は，外集団攻撃を行った個人が集団内で獲得する評判に影響を及ぼす状況要因を検討することで，どのような状況でこのようなタイプの攻撃が生じ得るのかを明らかにすることを目的とする。外集団攻撃者の評判を検討することは，適応論的な視点から内集団ひいきの生起メカニズムを論じた評判維持仮説（Yamagishi & Mifune, 2008）が外集団攻撃の文脈にも適用することができる可能性を探る上でも重要である。本研究は，先行研究に基づき，集団間紛争状況の有無と，純粋な内集団協力の選択肢の有無という2つの要因が外集団攻撃者の評判に関与している可能性をシナリオ実験と経済ゲームを用いて検証する。

P35：☆共感的配慮が利他行動の生起に果たす役割：損失可能性のある独裁者ゲームを用いた実験研究 (研究計画)

山本佳祐（京都文教大学）
橋本博文（大阪公立大学）

本研究の目的は、共感的配慮が匿名下での利他行動の生起に果たす役割を明らかにすることである。通常の独裁者ゲーム (DG) ではプレーヤーの困窮状態に関する情報が明確ではなく、共感的配慮が生起しにくいことが指摘される。そこで本研究は、受け手の困窮状態を操作するため、参加報酬が減額 (-0円 or -400円) されるオプションを加えた「損失可能性のあるDG」を考案した。また、参加者の匿名性を保証する非伝達条件と、匿名性に懸念が生じる伝達条件も設けた。共感的配慮が利他行動の生起に強く働きかけるなら、受け手の損失によって共感的配慮が誘発されるため、損失のない統制群において伝達条件よりも非伝達条件で分配額が低下する一方、損失のある損失群ではその条件差が小さくなると予想される。しかし、DGにおける利他行動が悪評回避のためのデフォルト戦略であるならば、そのような交互作用がみられないと予想される。

P36：＊社会における子育ての受容感：当事者と非当事者のデータの二次分析（研究計画）

齋藤慈子（上智大学）
厚澤祐太郎（目白大学）
角田梨央（上智大学）
野嵜茉莉（昭和女子大学）
森田理仁（人間総合科学大学）

人間は共同繁殖種であるが、現代では共同繁殖の機会が減少し、孤立した保護者に子育ての負担が集中しがちである。この状況の詳細を把握するには、子育ての当事者だけでなく、非当事者も分析する必要がある。本発表では、未就学児を持つ当事者と子を持たない非当事者を対象とし、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社が2020年に実施した『子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発に係る調査』のデータを用いた二次分析の計画を示す。（1）当事者については、援助を受けた経験が、子育ての心理的なストレス等の心理面に影響を及ぼし、社会における子育ての受容感に影響を与えるというモデルを、（2）非当事者については、子ども・子育てに接する機会が、子連れ家族を援助する意識等の心理面に影響を与え、それが実際の子連れ家族への援助行動に影響を及ぼし、さらに社会における子育ての受容感にも影響を与えるというモデルを想定する。

P37：声に関する同類婚についての実証研究（研究計画）

能城　沙織（木更津工業高等専門学校）

同類婚は幅広い集団、形質においてみられる傾向であり、特に顔に関してはモーフィングを用いて作成した自分類似顔を用いた実験を行うことにより、実証的に同類婚的傾向を検証する研究が行われてきた。一方で、声に関する同類婚についてはまだあまり調べられていない。自身の声は他者の声よりも魅力が高いことを調べた研究はあるが(Hughes & Harrison, 2013, Zhikang et al., 2018)、これらの研究は実験参加者の声そのものを評価に使っており、自身の声だと認識した状態で評価を行うことで判断に影響を与えている可能性が否定できない。本研究では、顔に関する同類婚の研究で確立されている手法と同様に、声に関してもモーフィング技術の応用により自分類似合成音声を作成し、刺激として用いることで声に関する同類婚的傾向を明らかにすることを目指す。

P38：☆◆人馬一体感を身体性から再考する──ヒト身体性に乗馬中のヒト-ウマ運動同期が及ぼす影響の定量的検討（研究計画）

山縣豊樹（北海道大学）
上田江里子（京都大学）
久保孝富（奈良先端科学技術大学院大学）
瀧本-猪瀬彩加（北海道大学）

人馬一体感は、ヒトが乗馬時に体験する「まるでウマと一体になったかのような」感覚として知られるが、これまでは質的調査のみで、定量的な研究はなされてこなかった。また、その質的研究では、ヒトの思い通りにウマを動かすことができる感覚（操作主体感）に焦点があてられており、身体性研究の文脈において主体感とともに盛んに議論される他の感覚（例えば、自己位置感）には触れられていなかった。そこで、本研究では、人馬一体感の一部はヒトの身体性の変容として説明可能ではないかという観点から人馬一体感を再考し、乗馬中のヒト-ウマ間運動同期が実際に身体性変容をもたらすかを定量的に検討する。具体的には、運動がより同期している場合に、自己視点が普段より高く知覚される（自己位置感の変容）等の変化が生じるかを検証する。本研究は、ウマとのインタラクションがヒトの基礎的な知覚に対してさえも影響することの証左となるかもしれない。

P39：＊☆伝達段階における社会規範バイアスの実験的検討(研究計画)

柿沼舞花(慶應義塾大学大学院社会学研究科)
安藤寿康(慶應義塾大学文学部)

内容バイアスは、情報そのものの魅力に対する選好(Boyd & Richarson, 1985)であり、その一つに、人と人の相互作用に関わる情報(社会的バイアス)がある。本研究では、社会規範(Crawford & Ostrom, 1995)へのバイアスが内容バイアスの一つとして加わる可能性を検討するために、社会規範は既知の社会的バイアスと区別できる可能性を示す。人は伝達の意図がある場合に、他者と共通基盤のある情報を伝達する傾向(Lyons & Kashima, 2006)をふまえ、社会規範へのバイアスは単なる社会情報以上に、伝達場面において顕著に生じる可能性がある。本研究は、伝達連鎖法を用い、伝達における受信・記銘想起・伝達段階の3段階(Eriksson et al., 2014)において、物語に含まれる社会規範情報への選好が、特に伝達段階において生じるか調べる。

P40：☆◆同種個体またはヒトパートナーによる不公平な報酬分配に対するウマの忌避反応の比較（研究計画）

米村朱由（北海道大学）
松井大（北海道大学）
瀧本-猪瀬彩加（北海道大学）

不公平忌避は、自身と他者の労力とそれによって得られる報酬のバランスを比較した際に認識された不公平に対して否定的に反応することであり、ヒト以外の動物でも存在が報告されている。しかし、従来の実験手法では、不公平忌避が不当に良い報酬を得る同種のパートナー個体と不公平な報酬を分配するヒト実験者のどちらに向けられたものであるかを区別することが難しかった。また、イヌやウマなどの家畜でも不公平忌避が確認されているが、家畜におけるヒトに対する不公平忌避は、人為淘汰を受け、同種個体に対する不公平忌避よりも弱められてきた可能性も考えられる。そこで、本研究では、実験手法を改良し、家畜のウマを対象として、同種個体による不公平とヒトによる不公平への反応を比較検討することとした。ウマは同種個体に対してだけでなく、ヒトに対しても不公平忌避を示すのか、ヒトに対する不公平忌避は家畜化によってより弱められたのかを検証する。